

# ①恋する証拠？

「いいですね。大好きな動物たちに囲まれて」とよく言われます。たしかにサファリで獣医師として働く私の周りには動物がたくさんいます。ライオン、キリン、ゾウ、サイなどなど。普段の生活の中では目につくことのない動物たちが、こうして原稿を書いている時にもそばにいるのです。これはこれで幸せなことなのでしょう。たぶん。

話は変わりますが、青春時代に「好きな人には何かれなかつた」という苦い思い出のある方も多いと思います。たとえば勝手に好きになり、片思いをしてしまった。私もそうでした。これも今となつては良い思い出です。辛い思いをしたはずなのに、なにか甘酸っぱい良い記憶になっています。これこそ幻想ですね。

実はサファリの獣医業は、この青春時代の恋愛に似ているのです。私は、動物が好きで獣医師になりました。好きだから一生懸命に勉強して獣医師になつたのです。好きな人のためならば、どんなことでも辛くはないという気持ちに似ているでしょうか。似ているのは、それだけではありません。

私は動物が大好きです。しかし、動物は私を好きではありません。はつきり言えばキライでしょう。動物を健康診断のために押さえつけ、無理やりに注射を打つ私を、動物たちがどうして好きになるでしょう。私はライオンが好きですが、ライオンにも好かれません。

青春時代の恋愛は、短くて甘く切ないものかもしれません。しかし、私のサファリ人生は、まだまだ続きます。「動物が好き」という、私の切な  
い片思いが叶う時は、来るのでしょうか？

まるで恋人同士のような、甘く切ないライオンとの時間を夢に見る。これこそ幻想！まさに私は、ライオンに恋をしているのです。



神田 岳委氏

1969年大分県臼杵市生まれ。日本獣医畜産大学(現:日本獣医生命科学大学)獣医学部卒業。  
九州自然動物公園アフリカンサファリ獣医師。著書に「サバンナに生きる—獣医さんの野生動物観察記」がある。

安心院の  
どうぶつ  
物語





神田 岳委氏

1969年大分県臼杵市生まれ。日本獣医畜産大学(現:日本獣医生命科学大学)獣医学部卒業。  
九州自然動物公園アフリカンサファリ獣医師。  
著書に「サバンナに生きる—獣医さんの野生動物観察記」がある。

# 安心院の どうぶつ 物語

## ②動物の病気？

先日、風邪をひいてしまいました。10年ぶりの風邪です。今まで少々無理をしても平気だったのですが、今回は寝込みました。病院に行き診療を受けた後、休もうと思ったところでサファリスタッフからの電話です。「ゾウの調子が悪いです。お願いします」。そこで私は、薬を飲んで出社し動物たちの治療を行いました。フラフラしながらの仕事でした。

さて「ゾウは、どんな病気になるでしょうか?」。もちろんゾウだけに発症する病気もありますが、実は人間と同じ病気になるのです。例えば、風邪もひきますし関節痛にもなります。プールで遊び過ぎて、中耳炎になった例もあります。目にバイ菌が入って結膜炎にもなります。人間と同じですね。

風邪をひいたゾウは、熱が出て元気や食欲がなくなり鼻水が出ます。あの長い鼻の先端から鼻水が出てきますが、ティッシュペーパーで拭くわけにもいきません。そこで鼻を振り回し、鼻水を飛び散らせます。その姿は、なかなか豪快です。その様子を見て「すごいな」と感心しているだけでは、サファリの獣医は務まりません。治療しなければなりません。

診療後に薬を飲ませます。症状がひどい場合は注射をしますが今回は投薬です。日本には「ゾウ専用」の薬はなく、ほとんどの場合、人間用の薬を使います。錠剤を3種類、それぞれ60錠、合計180錠を飲ませます。両手でも持ちきれない量です。ゾウは簡単には飲んでくれません。バナナやリンゴなどの大好物に埋め込んで、ダマしながら少しづつ飲ませます。この作業を1日2回、数日間繰り返していると案外ケロリと治ってしまいます。

1回目の投薬が終わるとゾウ担当スタッフが「この子は風邪が少し良くなるまで、何日か部屋で休ませるよ」と心配顔で言いました。とても良い判断です。動物にとっても休息は重要な治療ですから。

その日は忙しく、その後も数件の治療を行いました。フラフラになりながら、鼻水をティッシュで拭きながら…あれ! おかしい! 皆さんは、病気の動物には優しいはずのサファリスタッフですよね??

だれか私に、さっきのゾウ担当者のセリフを言ってくれませんか!

### ③「キリンの秘密」

皆さんがよくご存知のキリンは、背が高い、首が長いといった特徴だけでなく、いろんな秘密があります。

一つ目の秘密です。キリンは走るのが速い。なんと時速60キロ以上のスピードで走ります。二つ目の秘密です。キリンは「おしゃべり」です。キリンの鳴き声を聞いたことのある方は少ないでしょ。昔は「キリンは鳴かない動物」と言われていたぐらいですから。キリンの声は重低音。低すぎて人間にはほとんど聞こえません。でも調査すると、キリン同士ではかなり「おしゃべり」をしています。

三つ目の秘密です。キリンは高血圧。なんと最高血圧が300mmHgを超えます。人間だったら、即、入院ですよね。しかし、キリンはこのくらいの血圧が高くないと、頭のてっぺんまで血液が循環しないのです。

最後の秘密は「キリンは情熱的」ということです。優しくて可愛いイメージのキリンですが、問題はオス同士の戦い！ キリンのオスが恋愛時に行う争いは命がけ。メスをめぐってオス同士が首をぶつけ合い、ひどい場合には首の骨が折れて亡くなってしまうこともあります。「命がけの恋」って情熱的じゃありませんか？

私は、キリンに似ていると言わることがあります。おそらく、私の瘦せていく風貌がキリンのイメージにつながるかもしれません。

ほかにも、私とキリンには共通点があります。学生時代の私は走るのが速くて陸上選手でした。話すのも大好きです。今は若干の高血圧。キリンにそっくりですね。でも、私は情熱的ではありません。

好きな動物に似ていると言わることはうれしいことです。今後は完璧なキリンになるために、情熱的な獣医を目指します。誰かに首をぶつけてみようかな？



神田 岳委氏

1969年大分県臼杵市生まれ。日本獣医畜産大学(現・日本獣医生命科学大学)獣医学部卒業。

九州自然動物公園アフリカンサファリ獣医師。

著書に「サバンナに生きる—獣医さんの野生動物観察記」がある。



安心院の  
どうぶつ  
物語

## ④「シマウマ年」

今年の干支は「午」ですね。午年にちなんで、私も千里を駆ける駿馬のような才能ある人間になれるよう頑張ります。

馬と言えば、ふつうは乗馬や競馬の馬を思い浮かべると思いますが、サファリの馬の代表は「シマウマ」です。シマウマは、おつとりとした癒し系の動物として絵本やアニメにもよく登場します。草食動物でありますし、あのシマ模様を可愛らしく思う方も多いのでしょうか。

しかし、私たち飼育係から言わせればシマウマは猛獣です。すさまじい威力の攻撃方法を持つています。それは「蹴り」。その破壊力たるや、一蹴りでライオンのアゴを骨折させことがあるほどです。それだけではありません。噛むのです。バクッとガブリと噛むのです。この攻撃でライオンの背中の皮膚がベロリとむけてしまうこともあります。恐ろしい。

シマウマの正体を知ると、草食動物は必ずしもおとなしいとは言えなくなります。たしかに他の草食動物も、攻撃方法を持つています。しかし、天敵に襲われた時には逃げることが最優先で、攻撃は最後の方法です。シマウマは攻撃を優先するほど攻撃的な動物なのです。

やはり、サファリの獣医らしく今年の目標を変更です。シマウマのように家族や仲間を想い、動物たちを守る人間になりたいと思います。よく考えると昨年は、無理な仕事を蹴つ飛ばし、嫌な上司に噛みつくことが多くありました。

昨年と今年、どちらがシマウマのような生き方なのか白黒はつきりさせなければいけませんね。シマシマ模様のシマウマ年だけに……



神田 岳委氏

1969年大分県臼杵市生まれ。日本獣医畜産大学(現:日本獣医生命科学大学)獣医学部卒業。

九州自然動物公園アフリカンサファリ獣医師。

著書に「サバンナに生きる—獣医さんの野生動物観察記」がある。

安心院の  
どうぶつ  
物語



## ⑤ 慣れると好きになる

サイを見た小学生が言いました。「角が大きくて恐竜みたいだね」。

惜しいですが、その動物は恐竜ではなく、シロサイという立派な草食動物です。たしかに恐竜に見えないことがないですね。

ちなみに、サイの立派な角は、牛の角やシカの角とは違います。牛やシカの角は頭の横から伸びています。しかし、サイの角はおでこに生えています。生えている場所の違いだけでなく根本的に違うのです。サイの角は一生伸び続けます。人間の頭にあり、一生伸び続けるもの何でしょうか？ そう！ 髪の毛です。サイの角は、人間で言えば髪の毛と同じ成分で出来ていています。

ところで、わたしたち飼育係は毎日、シロサイ・ゾウ・キリン・ライオンを飼育しながら見ています。そのため、それらの動物の特徴を目の当たりにすることが当たり前になつてきます。サイの角が大きいのも、ゾウの鼻が長いのも、キリンの首が長いのも不思議に思わなくなっています。

入社当初の私は、最初に話した小学生のように「キリンは首が長いなあ」なんて思っていたものです。それが毎日一緒に仕事をしていると、慣れてくるのです。

慣れてくると、驚かなくなるばかりか「あのキリンの目がカワイイな」とか「あのサイの耳の形が好きだ」と言う飼育係もいます。それも中年のおじさん飼育員。まるで若かりし頃の恋物語を語るように。キリンを見ながらウツトリとするオジサンの姿は、なかなか文章では表現しづらいもの。

仕事が終わつた後、そのオジサン飼育員と更衣室で作業着を着替えていました。すると、そのオジサンが「先生！ 首が長いなあ」と驚いて大声で言いました。今さら驚かないでくださいよ。20年も一緒に仕事をしているのに。とはいって、キリンたち相手のよう、そのうち見慣れて、オジサンから「先生の長い首が好き」なんて言われても困るのですが…。

安心院の  
どうぶつ  
物語



神田 岳委氏

1969年大分県臼杵市生まれ。日本獣医畜産大学(現:日本獣医生命科学大学)獣医学部卒業。

九州自然動物公園アフリカンサファリ獣医師。

著書に「サバンナに生きる—獣医さんの野生動物観察記」がある。



神田 岳委氏

1969年大分県臼杵市生まれ。日本獣医畜産大学(現:日本獣医生命科学大学)獣医学部卒業。  
九州自然動物公園アフリカンサファリ獣医師。  
著書に「サバンナに生きる—獣医さんの野生動物観察記」がある。

# 安心院の どうぶつ 物語

## ⑥油断大敵 《最終回》

私たち飼育係にとって、「油断」は事故やケガをする原因になります。ですから、特に動物がいる前では油断しないようにしています。

サファリの新人スタッフは、特に注意です。最初はピクピクしていた新人も、少し時間が経てば慣れています。この「慣れ」こそが、油断の元なのです。「油断大敵だぞ!」と新人に厳しく伝えることもあります。

動物たちは、人間に比べて油断しません。油断をすれば、野生では生きていくのが難しくなるのでしょう。では、動物がまったく油断しないのかといえば、します。時間はかかりますが、安心させていけば慣れていき、最終的には「油断」します。

この動物はアカカンガルーです。写真ではノンビリと寝ていますが、こうなるまでには時間がかかりました。なにせ、カンガルーは臆病な動物ですから、慣らすのが大変でした。サファリに来た当時は、スタッフに驚き、物音に怯え、風が吹けば走り回るような状態でした。担当スタッフは、カンガルーの気持ちを想像しながら、声をかけ、安心させ少しずつ慣らしていきました。そして今ではしっかりと慣れてしまいました。

このカンガルーの「慣れ」に一番喜んでいるのは私です。理由は簡単。カンガルーの検査や治療が格段に楽になるのです。走ったり、暴れたりするカンガルーを治療するのは、大変です。それが、何ということでしょう!! 慣れてくれば、そばに行つて注射をチクリ。樂ちんです。

注射を打たれたカンガルーは、当然のごとく嫌な顔をして去つて行きます。そんな時、カンガルーに言っています。「油断大敵だぞ!」と。新人スタッフに言うように厳しくではなく、ニヤリと笑った顔ですが。カンガルーにとつて油断は大敵かもしませんが、私は大敵どころではなく「天敵」と思われているのかもしれません。